



甲虫ニュース

No. 136

December 2001

COLEOPTERISTS' NEWS

日本産エンマムシ上科概説 X^{注1}

大原 昌 宏

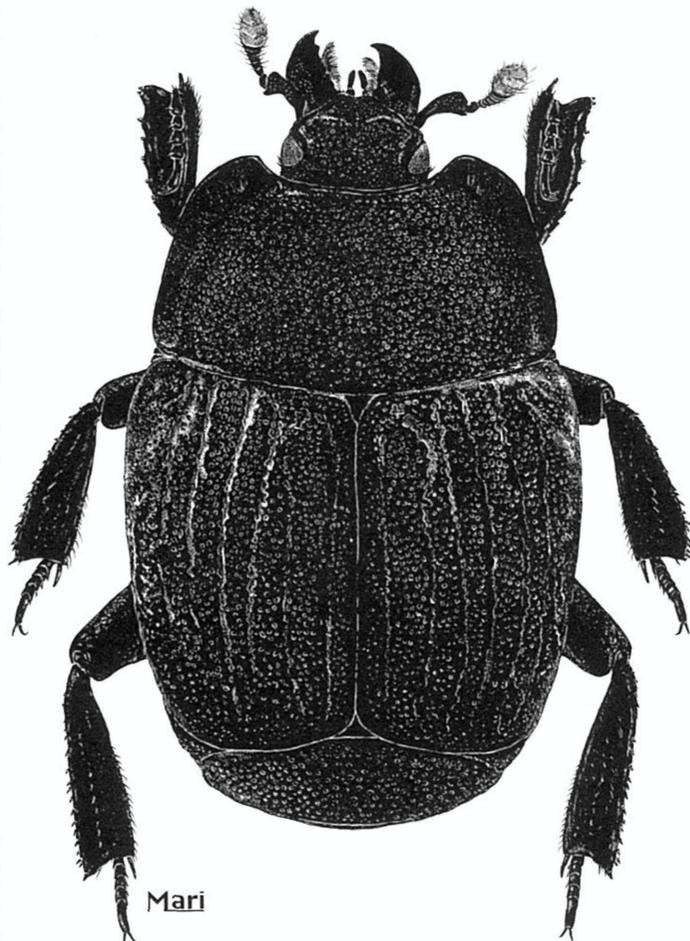
IX (本誌 122 号) までの概説の後、日本から 5 種の未記録種・新種が追加されたので解説をしたい。

アリクイエンマムシ (図 1, 2) *Margarinotus* (*Myrmecohister*) *maruyamai* M. ÔHARA, 1999

Margarinotus (*Myrmecohister*) *maruyamai* M. ÔHARA, 1999: 93.

1992 年 10 月の弘前大学で行われた日本昆虫学会の後、岩木山へ採集におもむいた。麓の岳 (嶽) 温泉の神社前に巨大なクロクサアリの巣があり、巣ぎわの小さな木片の下より見慣れないエンマムシが採集できた。大型のサイズと背面の点刻の特徴から、日本未記録種であることは直ちにわかったが、属の見当がつかない。「大変なものを採集してしまった..」と思いながら帰路についた。小樽へもどり検討を始め、近縁と思われた北米の *Psioscelis* 属の比較標本を取り寄せるなど準備をしたが、採集された標本は 1 個体、しかも雌なので記載はしばらく保留となった。

1997 年の日本鞘翅学会の同定会で、田添京二先生より山梨県産の本種 2 個体の寄贈を受けた。採集された原木氏によるとアリの巣の近くの樹液に来ていたとのことであった (田添氏私信)。標本も複数となり、そろそろ記載を.. と考えていた頃、北大に丸山宗利君が進学してきて、アリの巣に生活するハネカクシの研究を始めた。1998 年 6 月 8 日、「大原さん、アリクイエンマムシが採れ



Mari

^{注1} M. ÔHARA, Taxonomic note on the superfamily Histeroidea of Japan, X.

図 1. アリクイエンマムシ *Margarinotus* (*Myrmecohister*) *maruyamai* M. ÔHARA

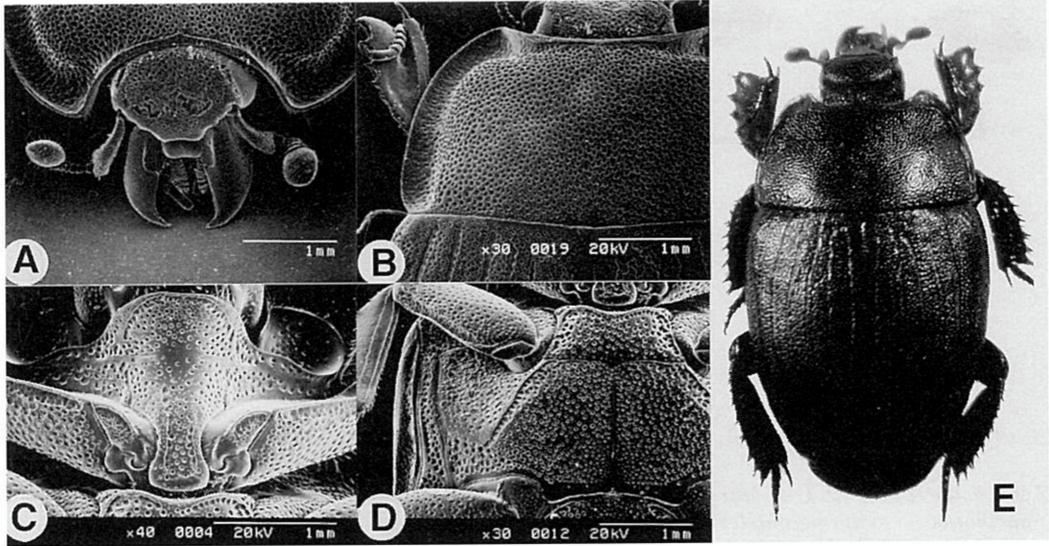


図2. アリクイエナムシ。A: 頭部, B: 前胸背, C: 前胸腹板, D: 中・後胸腹板, E: 外部形態が収斂したと考えられる北米産 *Psioscelis subopaca* (LECONTE)。

ました」と意気揚々と丸山君が研究室へ入ってきた。札幌円山のアリの巣から採集したという。彼の手許のシャーレには、生きた大型のエンマムシが5,6匹歩き回っていた。「アリをバリバリ食べてました」と丸山君。アリのつくった横トンネルにエンマムシが頭を入れてアリを食べるようすなどを聞いているうちに、和名はいつの間にか「アリクイエナムシ」に決まっていた。

雌雄交尾器の検討をして驚いたのは、当初の予想とは異なった結果の出たことだった。外見からすっかり *Psioscelis* 属の近縁種と思っていたのだが、交尾器形態から *Psioscelis* 属はクロエンマムシ属 *Hister* に近く、本種はヒメエンマムシ属 *Margarinotus* に近いものだった。両者ともアリとの関係が強い種なので、過度の収斂が起きているようだ。外部形態を顕微鏡で詳細に比較してみても、背面の点刻、完全な条溝、扁平な脚など極めてよく似ている。分類学者をも惑わせる収斂形態のできればえには息をのむものがある。

形態がかなり特異であるためヒメエンマムシ属とは区別すべきとも考えられるが、世界的に見るとヒメエンマムシ属は異質なものを多く含んでいる。アリクイエナムシ亜属 *Myrmecohister* を新設し、本属に含めた。

記載: 体長7ミリ; 長楕円形, 黒色。前頭は密に粗点刻を具え, 条溝は欠く。前胸背縁は著しく隆起; 側部は縁にそって深く掘られる; 表面は密に粗く点刻される。鞘翅の外副肩条, 第1-5背条, 会合条は完全; 鞘翅表面は密に粗く点刻される。前尾節, 尾節は粗大点刻を密に具える。脛節は扁平で, 前脛節は7外歯をもつ。分布: 日本(北海道, 本州)。

現在, 北海道(札幌), 青森, 山梨から採集されている。最近, 好犠性甲虫の人気が高まっているようであるが, その後の追加記録はまだ知られていない。

日本産の他種とは, 前胸背と鞘翅全体に粗い点刻をもつこと, 大型(約7ミリ)であることから容易に区別できるであろう。同様に背面に粗点刻をもつアラメエンマムシは, 前胸背, 鞘翅ともに無点刻部分を持つ。ヒラタカクヒメエンマムシはサイズがより小さい。

新亜属であるため, 新たな検索表を示しておく。本誌118号2ページ(以下188:2と略)への追加・変更。

- 1(2) 前胸背の側方は強く平圧されるか, 深く掘られる。後胸腹板の基節に挟まれる部分は粗点刻をもつ。
- 1a(1b) 前胸背の外側条をもつ。体長は約4ミリ。前胸背の側方は強く平圧され, 粗い点刻を具える。
.....ヒラタカクヒメエンマムシ亜属 *Kurilister*
- 1b(1a) 前胸背の外側条を欠く。体長は約7ミリ。前胸背の側方は深く掘られ, 側方のみならず前胸背全体に粗い点刻を具える。.....アリクイエナムシ亜属 *Myrmecohister*
- 2(1) 前胸背の側方は平圧されない。後胸腹板の基節に挟まれる部分は粗点刻を欠くか, まれに側条に沿っていくつかの点刻をもつ。

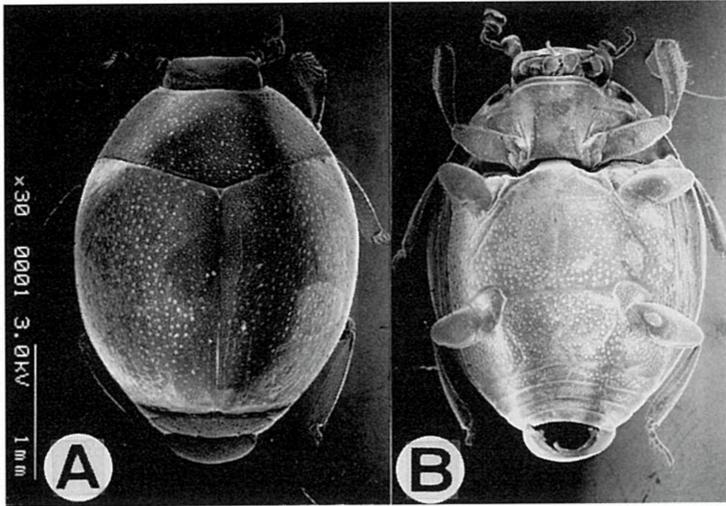


図3. アモリアナアキエンママシ. A: 背面, B: 腹面.

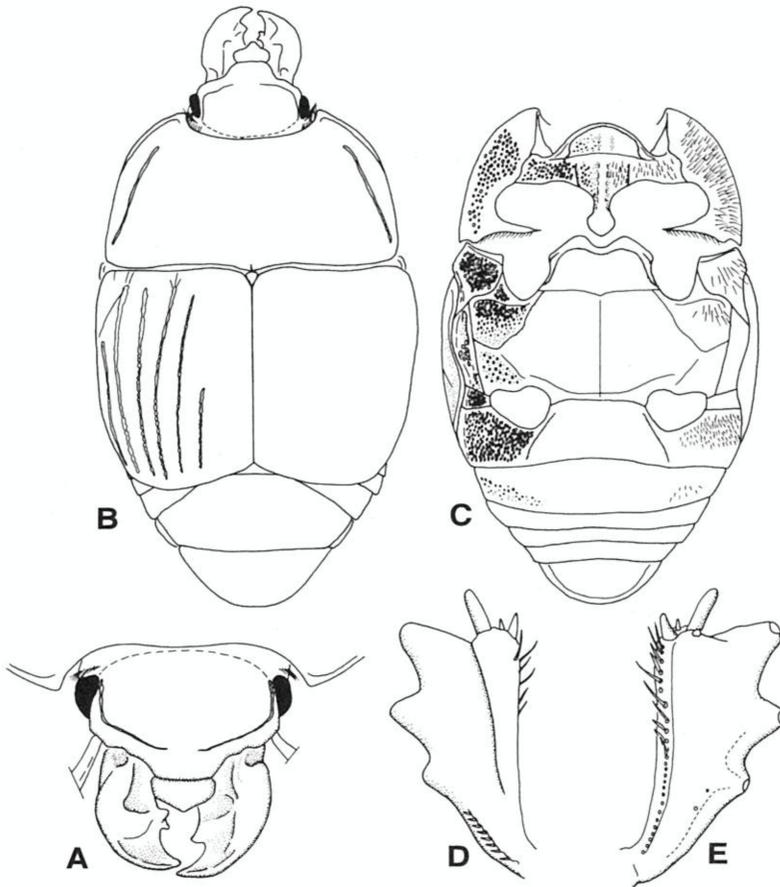


図4. タイワンオオエンママシ. A: 頭部, B: 背面, C: 腹面, D: 前脛節背面, E: 同腹面.

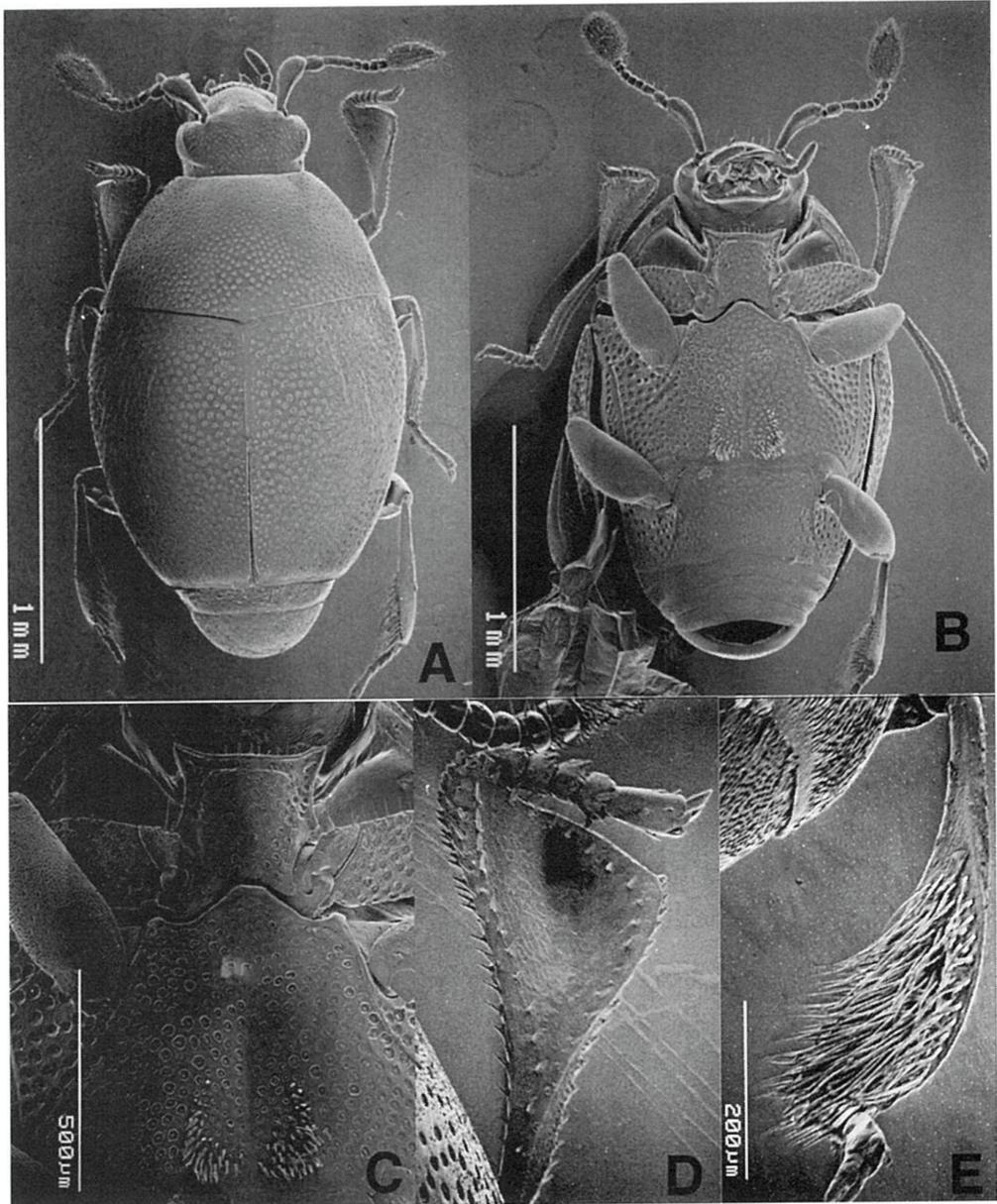


図5. スネビロツペンマムシ. A: 背面, B: 腹面, C: 前・中・後胸腹板, D: 前脛節背面, E: 後脛節背面.

アオモリアナアキエンマムシ (図3) *Tribalus (Eutribalus) yamauchii* M. ÔHARA, 1999

Tribalus yamauchii M. ÔHARA, 1999: 79.

青森県立郷土館所蔵の下山健作氏のコレクションを, 山内智学芸員の協力を得て調査させていただいた際に見いだされた. 西津軽郡十二湖産. ラベルには「キノコ」より採集されたと記されている.

アナアキエンマムシ亜科は従来日本からは *Epielus lucus* LEWIS とアマミアナアキエンマムシ *E. uenoi* M. ÔHARA の2種が記録されているだけであったが, ツブアナアキエンマムシ属(新称) *Tribalus* の本種が追加となった. 日本産では, ツブエンマムシ属 *Anapleus*, アカツブエンマムシ属 *Bacanius*, クロツブエンマムシ族 *Abraeini* の種と一見似るが, 本種の前胸腹板の構造が本誌 119: 2 の図3-C型であることから容易に区別でき

る (他は E, F 型).

記載: 体長 2.8 ミリ; 粒状で黒く, 脚, 触角は赤褐色. 前胸背は不規則に粗く点刻され, 粗点刻間には細点刻を密に具える; 前胸背側条は完全. 鞘翅第 1-4 背条は欠き, 会合条は後方 2/3 にある; 鞘翅表面は前胸背同様に点刻され中央基部は粗点刻を欠く. 前尾節, 尾節ともに粗点刻を密に具える. 前脛節は細かい 16 外歯をもつ. 分布: 日本 (本州: 青森).

属までの新たな検索表を示しておく (114: 4 の 1-3-4 に追加: 亜科までは 113: 4 を参照).

1(2) 鞘翅に条溝を具える. アナアキエンマムシ属 *Epiurus*

2(1) 鞘翅は会合条以外の条溝を欠く. もし具える場合は通常肩部に痕跡的にあるのみ.

..... ツブアナアキエンマムシ属 *Tribalus*

タイワンオオエンマムシ (図 4) *Pachylister chinensis* (QUENSEL in SCHÖHERR, 1806)

Hister chinensis QUENSEL in SCHÖNHERR, 1806: 88.

Pachylister chinensis: LEWIS, 1904: 146; ÔHARA, 1999: 106.

1994 年 11 月 22 日, 北海道立開拓記念館の堀繁久氏 (当時北海道環境科学研究所) が, エンマムシ標本を携えて小樽市博物館を訪ねて来てくれた. 採集されたエンマムシの中にわからないものがあるという. 早速標本を見せてもらおうと, 沖縄県石垣島で採集された特大のエンマムシが入っていた. 日本最大のエンマムシは, いわゆるエンマムシ *Merohister jekeli* であるが, それよりも大きい. 詳しく見ると台湾など東洋区に広く分布する本種であった.

その後, 豊田浩二氏より標本の寄贈をいただき, 小箱を開けてみると, 本種がずらりと並んでいた. 1996 年 11 月の日本鞘翅学会では平野幸彦氏からも石垣島で採集された本種を見せていただいた.

標本はいずれも 1994 年以降に採集されており, それ以前の記録は知られていない. 大型であること, 石垣, 西表島は多くの採集者が訪れている地域であることを考えると, おそらく 1994 年頃からの移入種であろう. 1998 年にも丸山宗利君が多数採集をしているので, ほぼ定着したと考えて良い. 他種とは, 体長, 属の特徴である上唇前縁が突出すること, 前胸腹側板に長毛を具えることで, 本種とイブシエンマムシが区別される. イブシとは鞘翅会合条を欠くことで区別できる.

記載 (本種は東洋区に広く分布しており大顎, 条溝に変異が多い. ここでは石垣, 西表島で採集された個体に基づいて記載する): 体長 7 ミリから 11 ミリ; 卵形; 黒色, 跗節は赤褐色. 前頭条溝は前方中央で短く途切れる. 大顎は良く発達し前頭部と同長ほど (タイ, インドネシアなどでは雄は 2 倍に達する). 前胸背縁条は側方で完全, 前方では広く途切れる; 外側条は前方半分にある; 内側条は側方でほぼ完全だが後方 1/6 を欠く; 表面は微細点刻のみ. 鞘翅の外副肩条は後方半分にある; 第 1-3 背条は完全; 第 4 背条は基部 1/8 から 1/3 を欠く; 第 5 背条は後方 1/3 にある; 会合条は欠く. 前尾節は不規則に粗点刻をそなえる; 尾節は密に粗く点刻される. 前脛節は大きな 3 外歯をもつ. 分布: 日本 (石垣島・西表島); 韓国; 台湾; 大陸中国; インド東部; 東洋区地域. フィジー, サモア, オーストラリア, ハワイへ移入.

属までの検索表 (115: 1 に追加).

12(17) 鞘翅の外副肩条は不完全.

12a(12b) 上唇の前縁は前方へ強く突出する. オオエンマムシ属 *Pachylister*

12b(12a) 上唇の前縁は弧状か直線状, 前方へは突出しない (例外としてイブシエンマムシではわずかに突出する).

スネビロツブエンマムシ (新称, 図 5) *Abraeus loebli* GOMY et M. ÔHARA, 2001

Abraeus loebli GOMY et M. ÔHARA, 2001: 3.

1988 年 7 月 16 日, 定山溪の土場の材上から, *Abraeus* 属の 1 種を採集した. 新種であることが明らかであったが, 1 個体しかも雌であることから保留になっていた. その後, やはり堀氏が持参してくれたエンマムシ標本に本種 2 個体が含まれており, 幸運にも雄だったため, 記載の準備を始めた. 私のポーランド留学などで, 発表が先送りになっていた頃, フランスの GOMY 氏から連絡が入り, 「スイスの Iwan Löbl 氏が京都での国際昆虫学会の折りに採集された標本が新種なので記載をするが, 日本の種でもあるので共著でどうか」と打診があった. 電子メールの内容を見ると保留にしている *Abraeus* の新種のことらしい. しかし私の手許にあるのは北海道のもので GOMY 氏のは本州のもの, さらにツブエンマムシ属 *Anapleus* sp. と記してある. 早速, 標本を送ってもらい確認をしたところやはり同一種であった.

GOMY 氏が *Anapleus* と誤解したのも無理はなく, *Abraeus* 属としては特異な卵形と平圧, そして粗い点刻を背面に持っている. 現在本属は旧北区からは 5 種が知られるが全て球形の体形を持つものである.

さらに本種は特徴的な性的二形をもつ. 雄の後胸腹板には腹毛が生えており, 後脛節内側には脛毛が生えている. どちらも, 交尾の際, マンウト体位になった状態で雌との接触面に生えている毛であり, 重要な感覚毛の役目を果たしていると考えられる. 同じような腹毛はエンマムシ科ではエゾセスジエンマムシ *Onthophilus*

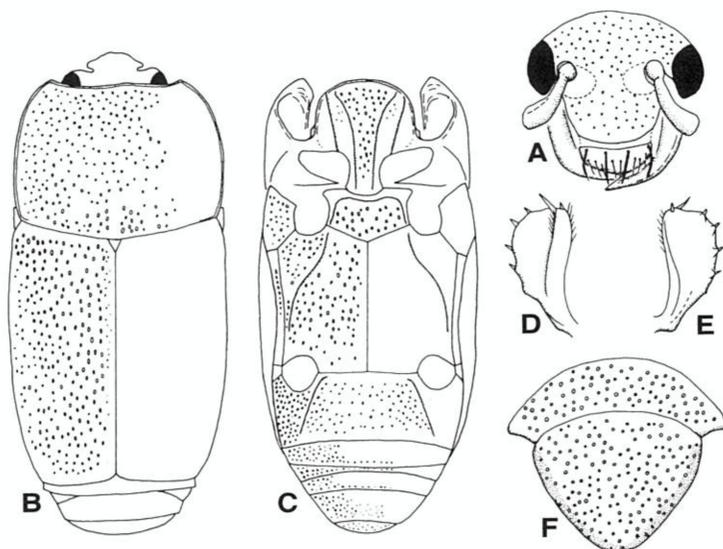


図 6. イシガキナガツブエンマムシ. A: 頭部, B: 背面, C: 腹面, D: 前脛節背面, E: 同腹面, F: 前尾節・尾節.

ordinarius, デオキノコムシ科では *Scaphidium* 属などで知られる.

記載: 体長雄 1.5-1.8 ミリ; 雌 1.8-2.1 ミリ; 卵形, 赤褐色で, 触角, 脚は黄褐色. 頭部, 前胸背, 鞘翅, 前尾節, 尾節は密に粗点刻を具える. 鞘翅には短い第 3, 4 背条が前方半分に弱く刻まれる. 雄は後胸腹板中央後方に毛の房を持つ. 前脛節外縁は中央で突出し脛節は三角形をなす. 雄の後脛節内側には長い毛の房を持つ. 分布: 日本 (北海道, 本州).

イシガキナガツブエンマムシ (新称, 図 6) *Macroabraeus akiyamai* M. ÔHARA, 1999

Macroabraeus akiyamai M. ÔHARA, 1999: 126.

故秋山黄洋氏は時々北大の研究室に電話をかけてきてくれた. 私のために知人に声をかけてエンマムシの標本を集めてくださり, 「その標本を送るから..」という内容が多かった. 秋山氏の紹介で多くの人と標本に出会うことができた. 秋山氏を介して, 高橋敬二氏が石垣島でトラクトラップを用いて採集した標本をいただき, その中から本種は見つかった. 種小名は秋山氏に献名.

微少なエンマムシで, 一見ホソチビヒラタエンマムシ属 *Paromalus* のような外見であるが, 前胸腹板の構造はクロツブエンマムシ亜科のもの (本誌 119: 2 の図 3F) である. 該当する属がないので新属 *Macroabraeus* を新設した. その後 MAZUR 氏からの指摘で, *Acritomorphus* 属 (パラワン島から 1 種のみ) のシノニムらしいことがわかっている. これは改めて論文で正式に発表したい. このことから本属は島嶼に分布する種のように思われるが, 微少なエンマムシでもあることから今後の東南アジア区での詳細な研究が必要であろう.

体サイズ, 体形, 前胸腹板構造から本種は従来の日本産既知種と区別されるはずである. 南西諸島から同属の未記載種が見つかる可能性は十分にあるので, 詳細な記載等は website を見ていただきたい.

記載: 体長 1.5-1.8 ミリ; 筒形, 黒色, 触角, 脚は褐色. 上唇には 4 本の長い刺毛と 8 本の短い刺毛を具える. 頭部, 前胸背, 鞘翅前尾節, 尾節はまばらにやや粗い点刻を具える. 前脛節は 5 外歯を具える. 分布: 日本 (石垣島).

クロツブエンマムシ亜科の上記 2 属 2 種が増えたため, 改めて検索表を提示する (120: 3 の 1-3-8).

- 4(3) 前胸背は溝をもたない. 前胸腹板に X 字状の陥没はない. 中胸と後胸の腹板は縫合線で区別される.クロツブエンマムシ族 *Abraeini*
- 5(8) 体形は卵形で, 背面は凸形.
- 6(7) 黒色で背面には短い毛を密に具える.クロツブエンマムシ属 *Chaetabraeus*
- 7(6) 赤褐色で背面に毛はない.スネビロツブエンマムシ属 (新称) *Abraerus*
- 8(5) 体形は筒形で, わずかに背面中央で平圧される. 背面に毛はない.ナガツブエンマムシ属 (新称) *Macroabraeus*

謝 辞

文中でお名前をあげた方々には日頃より様々な形で研究にご協力いただいた。改めて厚くお礼申し上げる。

後 記

現在までの「日本産エンマムシ上科概説」はインターネット上においても公開している。また、種レベルでの記載分類情報をデータベース「Emmamushi」(構築中)において公開している(<http://www.museum.hokudai.ac.jp/organization/staff/Emmamushi/EMMAMUSHI.HOME.html>)。特に後者は、世界のエンマムシ 4000 種全ての原記載、標本写真、標本情報、分布情報などを網羅するプロジェクトのため、人的な労力が必要である。記載入力などのボランティアをお願いできる方がいらっしゃればご連絡をいただきたい(大原まで: ohara@museum.hokudai.ac.jp)。

引用文献

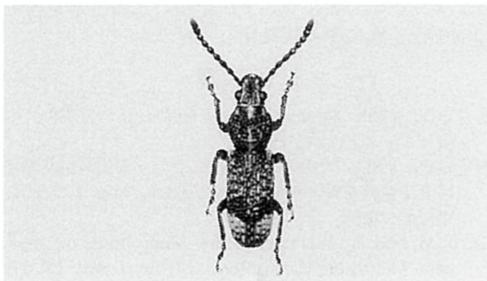
- GOMY, Y. and ÔHARA, M., 2001. Un *Abraeus* LEACH nouveau du Japon (Coleoptera, Histeridae). *Revue Suisse de Zoologie*, **108**(1): 3-10.
- LEWIS, G., 1904. On new species of Histeridae and notices of others. *Ann. Mag. nat. Hist.*, (7) **14**: 137-151.
- 大原昌宏 (1996a). 日本産エンマムシ上科概説 I. 甲虫ニュース, (113): 1-4.
- 大原昌宏 (1996b). 日本産エンマムシ上科概説 II. 甲虫ニュース, (114): 1-5.
- 大原昌宏 (1996c). 日本産エンマムシ上科概説 III. 甲虫ニュース, (115): 1-6.
- 大原昌宏 (1997a). 日本産エンマムシ上科概説 V. 甲虫ニュース, (118): 1-5.
- 大原昌宏 (1997b). 日本産エンマムシ上科概説 VI. 甲虫ニュース, (119): 1-6.
- 大原昌宏 (1998). 日本産エンマムシ上科概説 IX. 甲虫ニュース, (122): 1-3.
- ÔHARA, M., 1999. A revision of the superfamily Histeroidea of Japan (Coleoptera), Supplementum I. *Insecta matsumurana, new series*, (55): 75-132.
- SCHÖNHERR, C. J., 1806. Synonymia Insectorum, oder Versuch einer Synonymie aller bisher bekannten Insecten; nach FABRICII Systema Eleutheratorum geordnet, mit Berichtigungen und Anmerkungen wie auch Beschreibungen neuer Arten und Illuminirten Kupfern. Erster Band. *Eleutherata* oder Käfer. Erster Theil. *Lethrus*... *Scolytes*. xxii + 289 pp. Stockholm.

(北海道大学総合博物館)

○ナガフトヒゲナガゾウムシを宮崎県野尻町で採集

ナガフトヒゲナガゾウムシ *Xylinada striatifrons* (JORDAN, 1895) は本州・台湾・インドシナ・インドから記録のあるヒゲナガゾウムシである。九州からの記録は知られていないと思われるので参考までに記録しておく。

1♂, 宮崎県西諸県郡野尻町萩の茶屋, 3.VI. 2000, 足立一夫採集。



採集した場所及び状況は国道 268 号線沿いにある公園の自動販売機の設置された建物の天井に夜間

アシナガオニゾウムシやアオカミキリモドキ等と共に飛来し、静止していた個体である。

なお、採集地点の萩の茶屋は名称の通り、各地のハギ類の植栽された公園であり、ハギ類よりもツツジ類、サクラ類が多く植栽されている。このような環境下で小型とは言え、このように目立つヒゲナガゾウムシが灯火に飛来するには自然環境に乏しい感じがするが、自動販売機より約 70~80 m の公園と隣接した位置にスダジイ、イチイガシ、タブノキ等の照葉樹林の自然林(恐らく切り残しの原生林)が存在しており、この林より飛来したものと思われる。

参考文献

- 森本 桂, 1984. ヒゲナガゾウムシ科. 原色日本甲虫図鑑 (IV) pp. 235-236, 保育社, 大阪.
- 森本 桂, 1989. ヒゲナガゾウムシ科. 日本産昆虫総目録 pp. 488, 九州大学農学部昆虫学教室, 福岡.

(福岡県福岡市, 足立一夫)

○*Haplomalachius ishiharai* 大量発生を観察例

Haplomalachius ishiharai は関東の低湿地より得られた標本をもとに、M. SATO and W. WITTMER (1989)において新種として記載されたジョウカイモドキの一種である。記載されたのが比較的最近であり、これまでの記録や知見もほとんどないのが現状である。筆者は渡良瀬遊水池の埼玉県側において本種の大発生を観察する機会に恵まれたので、生態に関する知見を含めて報告する。

本種の発生が確認されたのは、遊水池の縁にある草地と渡良瀬川流域の一部である。本種の生息環境については原記載の要約部に「草地的環境」と記されており、新井(1998)ではこれまで知られているいくつかの産地の環境より「湿地周辺の草地」と推測がなされている。また、金子(1997)では「春の多摩川河川敷で普通に見られる」と述べている。渡良瀬の産地はこれらの環境とほぼ同様のものではあった。現地状況を具体的に述べると、アシの生える湿地部の周囲にチガヤ類が生い茂るような場所である(図1)。こうした場所を捕虫網でスウィーピングすることにより、多数の個体を捕獲することができた。ただし、アシの生える湿地部分には全く見られず、また湿地ではない完全な草地も同様であった。つまり、湿地の水気が無くなる辺りにだけ、帯状に発生が確認されたのである。この場所では個体密度が異常なまでに高く、草葉上を活発に動きまわる個体が数多く見られた(図2)。周囲の花を訪れる様子はなく、*Malachius* 属の種などとはずいぶん違った印象を受けた。しばらく観察を続けたが、草上をただ歩き回るばかりで落ち着く様子はなく、結局何を食べているのかについてはわからずじまいであった。また、渡良瀬川の河岸ではカラシナの花を訪れていたが、ここでも花に潜っていたわけではなく、特に興味もないようで偶然に飛来したようであった。発生地における個体密度の高さは、ホストとの関連が大きく影響していると思われるので、今後はより詳細な観察が必要である。

本種の好む「湿地周辺の草地」は、最近では休耕田や廃田跡に湿地環境が再生され、にわかに広がりつつあるようにも受け取れる。しかしその反面、これまで残されていた良好な河川・湿地環境は、河川の護岸工事や宅地開発等による湿地の造成によって減少の傾向にある。現に、本種の基準産地のひとつ戸田市道満や、新井(1998)で報告された東松山市毛塚の産地は造成によって、それまでと全く違った様子が変わってしまった。渡良瀬遊水池のように広大な湿地環境が保たれている場所は、本種の様に微妙な環境を好む種にとっては、貴重な産地であると言える。今後ともこうした場所が保たれる事を願ってやまない。また、生態的な知見が明らかになるにつれて、平野部の河川敷や湿地周辺で新たな産地が見つかる可能性も高いので、春先のこうした場所での採集は注意して見る必要がある。ちなみにこれまでの記録は4月上旬から5月中旬に集中してい



図1. 渡良瀬遊水池の生息環境。



図2. 草葉上で動きまわる成虫。

るようである。

今回得られた標本のデータは以下のとおり。

77頭(雌雄ほぼ同率を含む)、埼玉県北川辺町渡良瀬遊水池, 3.V.2000, 新井志保ならびに筆者採集, 保管; 2♀♀, 埼玉県北川辺町渡良瀬川河川敷, 3.V.2000, 筆者採集, 保管。

また、江戸川流域で得られた標本を保持しているので、あわせて報告しておく。

1♀, 埼玉県幸手市中島江戸川河川敷, 30.IV.1998, 内田正吉採集, 筆者保管。

末筆ながら調査に協力していただき、文献についても御教示いただいた東京農業大学昆虫資源学研究室の新井志保氏に、また貴重な標本を恵んでくださり、データの公表について快諾頂いた埼玉県寄居町の内田正吉氏に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 新井志保, 1998. *Haplomalachius ishiharai* の採集例. 甲虫ニュース, (124): 15.
金子義紀, 1997. 大田区のコウチュウ目. 大田区自然環境保全基礎調査報告書—大田区の昆虫—, pp. 130-154. 東京都大田区.
SATO, M. and W. WITTMER, 1989. Some notes on Japanese Melyridae (Coleoptera). *Elytra*, Tokyo, 17: 57-60.

(埼玉県嵐山町, 豊田浩二)

日本産オバボタル属における異種間配偶実験 2 例

川 島 逸 郎

はじめに

日本産オバボタル属 Genus *Lucidina* は 4 種から構成され、成虫の体は扁平で、特に雄は長大な触角を持つことが共通した特徴である。1 種は沖縄県八重山諸島西表島に隔離して分布するが、その他の 3 種は本土に生息し、特に本州には 3 種ともに分布している。いずれの種も昼行性で、羽化直後を除いては全く発光することなく、発光コミュニケーションに頼らず匂い物質（性フェロモン）のみを介して配偶を成功させていることはほぼ確実である。こうした配偶行動システムは、ホタル科昆虫の発光コミュニケーション研究の先駆者であるアメリカ合衆国のロイドによってケミカル・コミュニケーションとして初めて報告され (LLOYD, 1972)、その後、日本産ホタルの配偶行動を研究し、6 システムに分類した OHBA, (1983) により LB システムとも称された。また、同じコミュニケーション・システムを持つ種は、特に島嶼性マドボタル属 Genus *Pyrocoelia* のように同じ匂い物質を共有しているものの、発生期の相違や地理的な生殖隔離によって交雑が回避されているとされた。こうした経緯を経て、現在までに日本産ホタル科における異種間での配偶実験例は、種ごとの発生期の相違などの障壁などのために少なく、これまでに OHBA (1983) および大場・後藤 (1990) により報告されているのみである。今回筆者は日本産オバボタル属 3 種において、2 通りの組み合わせで簡単な配偶実験を行うことができたのでここに報告しておきたい。

なお、最近になってホタル科における性フェロモンの化学構造の特定に関しては、SHIBUE, K. *et al.* (2000) によってその分析方法が報告されているほか、現在もイリオモテボタル科をも含めて各種について分析が進められており、今後性フェロモンの化学構造レベルでの種分化の実体が明らかにされていくことが期待される。

材料および方法

本実験に用いた種構成および採集データは以下の通りである。

オオオバボタル *L. accensa* GORHAM 愛媛県上浮穴郡面河村大成 (おおなる), 13. VII. 1998.

オバボタル *L. biplagiata* MOTSCHULSKY 神奈川県三浦郡葉山町桜山大山林道, 4. VI. 1997; 愛媛県上浮穴郡面河村大成 (おおなる), 13. VII. 1998.

コクロオバボタル *L. okadai* NAKANE *et* OHBAYASHI 岐阜県岐阜市日野南達目洞 (だちぼくぼら), 3. VI. 1997.

いずれも筆者採集。

野外で採集した個体は生かしたまま持ち帰った。使用した容器は 9×6×4 cm の透明アクリル製である。この容器内へ最初に雌個体を投入し、落ち着き静止するのを待った。その後雄 1 個体を投入して、後の行動を目視観察して記録を行い、以上の過程を数回繰り返した。なお、煩雑になることを避け、以下の結果本文では種名末尾の「・・ボタル」は省略した。

結 果

コクロオバボタル雄×オバボタル雌: 容器内へ投入されたコクロオバ雄は盛んに歩行し、時折飛翔を交えた。しかし頭部を前上方へ伸長させて両アンテナを左右へ振り回す探雌行動 (大場他, 1996) は解発されず、オバ雌に対しては何らの関心を示す様子がなかった。オバ雌に行き当たったコクロオバ雄は、そのままオバ雌の背面を乗り越えて歩行通過し、オバ雌への誘引反応・マウント等は全く見られなかった。以上のような行動は、コクロオバ雄がオバ雌へ接触する度に何度も繰り返された。なお、オバ雌がコクロオバ雄を忌避する様子は見られなかった。このオバ雌個体は、オバ雄個体とは容易に交尾した。

オオオバボタル雄×オバボタル雌: 容器内へ投入されたオオオバ雄は次第に活動性が高まり活発に歩行・飛翔するようになり、さらに頭部を前上方に伸長させて両アンテナを立てて左右に振り回す探雌行動が解発された。オオオバ雄はオバ雌に行き当たるとすぐにその背面上に乗り、前後に行ったり来たり往復を繰り返した。しばらくの後にオバ雌と同一方向を向きマウントを行った。しかしこの行動は同種間で解発される配偶行動ほどには長続きすることなく、オオオバ雄は 10~30 秒でオバ雌から離れた。オオオバ雄はその後も探雌行動を再開し、オバ雌に行き当たった以上に以上のようなプロセスでマウントを試みた。しかし最終的には完全な交尾が成立するには到らなかった。なお、オバ雌はオオオバ雄に対して特に忌避する様子は見られなかった。

考 察

コクロオバボタル雄×オバボタル雌: 観察結果から判断する限り、両種の間では性的な匂い物質 (性フェロモン) の化学構造の段階ですでに差異が生じていると考えられる。オバボタルが平地から山地まで幅広く生息

し、その分布域も北はサハリン・千島・北海道から南は九州・屋久島までと広大であるのとは対照的に、コクロオバボタルは日本特産でこれまでに岐阜・三重の2県から記録されているのみであり、さらにその分布域はスポット状にきわめて限定されている。近年の調査から、その微生息環境(ミクロ・ハビタット)はオバボタルのような森林域ではなく開けた草原で、しかもやや低湿地状の部分に限定されていることが確認されている。また、このようにオバボタルと明瞭にすみ分けている現象が生じた背景には、両種が同一の匂い物質を持つことで競合し、コクロオバボタルがより優勢なオバボタルに追いやられ封じ込められた結果的な産物であるとの推測がなされている(大場他, 1996)。しかし、今回の実験結果からこの仮説は否定され、両種の匂い物質は全く異なった化学構造を持つことが想定された。次項に記述するオオオバボタルとオバボタルが多くの場合同所的に生息しているのとは対照的に、コクロオバボタルとオバボタルが完全にすみ分けている背景には、何か別の生態的な要因が絡んでいると推測される。

オオオバボタル雄×オバボタル雌: 面河山岳博物館での事前の所蔵標本調査により、面河溪一帯には両種ともに生息することが確認されており、今回の実験で用いられた両個体も、ともに同日同地点(面河村大成)で採集されたものである。この場所ではほぼ確実に両種の間で生殖隔離が生じているとみなされる。本報告における組み合わせでの実験は大場・後藤(1990)でも行われており、その記述はやや要領を得ないが、今回の結果と同様に交尾行動までは解発されるものの、完全な交尾までには到らなかったことが読みとれる。今回の実験結果や現在までのこうした知見から判断する限り、両種の匂い物質の化学構造はある程度までは共通している想定される。両種が同所的に生息するその他の産地においても同様の現象が生じていることが予想され、今後更なる実験調査が望まれる。なお、大場(1986)は、両種間は雄交尾器が異なるので生殖的に隔離されるとみなしているが、両種ともに体の大きさ・形状の変異が大きく、それと平行して雄交尾器にも個体変異がみられる(川島, 未発表)ことから、現段階では雄交尾器の厳密な形状的差異のみによって生殖隔離が生じていると見なすべきではない。雄交尾器に著しい個体変異が存在することは、すでにコクロオバボタルにおいても報告されている(大場他, 1996)。

謝 辞

本報文を作成するに当たり、文献の手配等をお願いした東京都立大学理学部の鈴木浩文博士および武蔵野美術大学の渋谷桂子博士、調査期間中に多大な協力を寄せられた岐阜県昆虫分布研究会の高井 泰氏、面河山岳博物館前学芸員の漆原ひろみ(現姓丹羽)氏に深く感謝申し上げる。

引用文献

- LLOYD, J. E., 1972. Chemical Communication in Fireflies. *Environmental Ent.*, 1(2): 265-266.
 OHBA, N., 1983. Studies on the Communication System of Japanese Fireflies. *Sci. Rept. Yokosuka City Mus.*, (30): 1-62, 6 pls.
 大場信義, 1986. ホタルのコミュニケーション—16. 動物 その適応戦略と社会—, 241 pp. 東海大学出版会, 東京.
 大場信義・後藤好正, 1990. ホタルの実験的異種間交尾. 横須賀市博研報(自然), (38): 1-5.
 大場信義・高井 泰・後藤好正・川島逸郎, 1996. コクロオバボタル雄成虫の外部形態・習性および生息環境. 横須賀市博研報(自然), (44): 33-45.
 SHIBUE, K., GOTO, Y., SHIBUE, T. & N. OHBA, 2000. Analysis of Sex-Attractant Pheromons of Firefly *Pyrocoelia oshimana* by Gas Chromatography Mass Spectrometry. *Anal. Sci.*, 16: 995-996.

(神奈川県横須賀市)

○クリイロヒゲハナノミを横浜市中心部で採集

クリイロヒゲハナノミ *Macrotomoxia castanea* PIC (= *Higehananomia palpalis* KÖNO) はインドシナから日本にかけて分布(HORAK, 1999)し、関東地方南部を北限とする。その関東地方でもすでに数例が記録されているが(高桑, 1998, 本誌, (123): 1-4), ほとんどは灯火に飛来した個体である。筆者も偶然だが、スタジイの下枝をフィービングして1個体を採集したので報告しておく。本科のものはネットに入れた際、ふつう顕著に動き回るものだが、この個体はまったく動かずに擬死状態を示していた。

1♂, 横浜市西区宮崎町, 26. VII. 1999, 高桑採集。

採集地は繁華街を見おろす高台の住宅地の一角で、斜面緑地として狭いながらも比較的良好な樹林地に接している。

なお、筆者はこれまで関東地方産の採集例を偶発的なものの可能性も考えていた(高桑, 1998)が、今回の例からはむしろ発生していると思なすべきであろう。

ただし、それが自然分布によるものか、あるいは人為が関与した結果であるかどうかは分からない。

(神奈川県立生命の星・地球博物館, 高桑正敏)

コメツキムシの文献紹介 (2)

鈴木 互

昨年、中央ヨーロッパのコメツキムシのモノグラフが相次いで出版された。これらは、日本や近隣地域のコメツキムシを研究する上でも重要な文献と思われるので、ここに紹介しておきたい。

[I]. ポーランドのコメツキムシ (写真 1).

Fauna Polski, 21: Elateridae I. Dariusz TARNAWSKI 著. [Published by Museum and Institute of Zoology Polish Academy of Sciences.] 変形 B5 版, 411 頁, 691 図, ハードカバー. 本文: ポーランド語 (付英文検索表・摘要). 2000 年 3 月 30 日 発行.

ポーランドのコメツキムシに関しては, BURAKOWSKI *et al.* (1985) によりまとめたカタログがあり, 47 属 123 種が記録されているが, 本書 (1 部・2 部) ではその後確認された種も加え, 合計 52 属 132 種のコメツキムシが掲載される. 今回発行された第 1 部では, サビキコリ亜科 Agrypninae, ミズギワコメツキ亜科 Negastrinae, セマルコメツキ亜科 Diminae, ツヤハダコメツキ亜科 Athoinae の 4 亜科 37 属 76 種の解説がされる一方, コメツキムシ科全体の系統についての論述もあり, 見逃せないものとなっている. 本書で取り扱われなかった残りのコメツキ亜科 Elaterinae とハナコメツキ亜科 Cardiophorinae については第 2 部にまとめられ, 近く発行されるはこびになっている. 本文はポーランド語だが, 幼虫・成虫ともに, 多くの形態図を伴った検索表が付けられおり, 検索表や要約などの肝心な部分は英語で書かれているので, とくに幼虫の研究をする上での利用価値が高い. 分類体系は, 研究者により意見が分かれるところであるが, ヒゲ

コメツキ族 Pectocerini を STIBICK (1979) 同様に Pityobiinae 亜科に置く一方で, ヒゲコメツキ属 *Pectocera* をオオヒゲコメツキ亜科 Oxynopterinae の構成員としてあげるなど, ちぐはぐな面も見られた.

この Fauna Polski のシリーズではカツオブシムシ科 Dermastidae (vol. 4), エンマムシ科 Histeridae (Vol. 9), ハムシ科 Chrysomelidae (Vols. 10, 13, 15, 16, 17, 20), マメゾウムシ科 Bruchidae (vol. 11), ハナノミ科 Mordellidae (vol. 18) がこれまでに出版されている. 次のインターネットのサイトを通して購入することができる. 本書の内容そして体裁からみてもとても安い出版物である. <http://www.pan.pl/miiz> US35\$.

[II]. チェコとスロバキアのコメツキムシ (写真 2).

Elateridae of the Czech and Slovak Republics. Stanislav LAIBNER 著. [Kabourek]. B5 版, 268 頁, 519 図, 9 原色写真図版. ハードカバー. 本文: 英語・チェコ語. 2000 年発行. ISBN 80-901466-6-X.

チェコとスロバキアのコメツキムシのモノグラフは, JAGEMANN (1955) の幼虫・成虫双方を扱った詳細なものがあったが, 残念なことに本文が全てチェコ語で書かれ, この言語に不慣れな人にとっては, 内容を理解することが難しい状況にあった. 今回, 出版された本書は, 58 属 153 種についてチェコ語と英語の二カ国語で解説されており, すこぶる利用価値が高い. 分類体系には, きわだてて大きな変化はなく, ほぼ STIBICK (1979) を踏襲した形となって

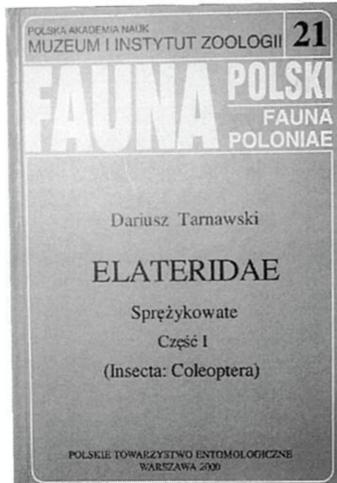


写真 1.

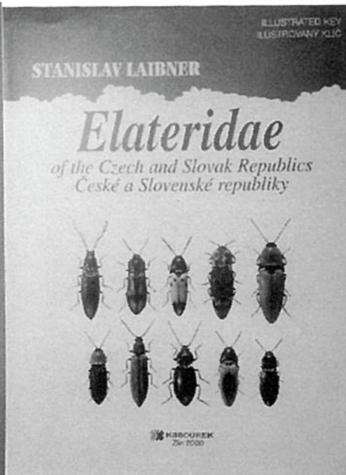


写真 2.

いる。幼虫についてまったく触れられていないのが残念であるが、519にも及ぶ形態図と何と云っても、巻末に置かれた9枚の原色写真の図版(149種272図)には圧巻させられる。プロのカメラマンが絡み、1つ1つの個体が大きく撮影されていることと、私には到底真似のできいほどにまできちんと整えられた触角と脚は、まるで日本のカミキリ大図鑑を眺めているかのようなのである。最近、ヨーロッパにおいてコメツキムシを研究する人が増えてきているが、この本は、そのブームにさらに火をつけるのではないだろうか。コメツキムシ屋必携の一冊と言って良いだろう。ヨーロッパ各国の昆虫関係書店サイトで購入できる。国内では、パウアー・アンド・サトウ・ジャパンや昆虫文献六本脚で入手できる。

参考文献

- BURAKOWSKI, B., M. MROCKOWSKI & J. STEFANSKA, 1985. Charzaszce (Coleoptera), Buprestoidea, Elateroidea, Cantharoidea. *Katalog Fauny Polski*, 23 (10): 1-401, 1 map.
- JAGEMANN, E., 1955. Kovarikoviti-Elateridae (Rad: Brouchi-Coleoptera). *Fauna CSR, Praha*. 302 pp., 78 figs.
- STIBICK, J. N. L., 1979. Classification of the Elateridae (Coleoptera). Relationships and classification of the subfamilies and tribes. *Pacif. Ins., Honolulu*, 20: 145-186.

(東京都世田谷区)

○キタクロベニコメツキを足寄町糠南川で採集

キタクロベニコメツキ *Denticolloides hosokawai* ARIMOTO は、北海道土幌町三股で採集された1♀に基づき、新種・日本新記録属として報告された。本種の採集記録は今のところ他にないようであるので、ごく近接した産地ではあるが、筆者が採集した1頭を記録しておきたい。

1♀、北海道足寄町糠南川上流・鹿紅橋付近(環境省メッシュ番号6543-12-52), 29.VII.1988, 芳賀 馨採集, 保管。



採集地点は十勝川の支流の一つ美里別川の支川である糠南川の上流で、土幌町三股から流下する音更川とは尾根1本を隔てて東隣に位置する。環境は三股周辺とよく似た、アカエゾマツの多いエゾマツ・トドマツ群集で、谷底の林道沿は伐採されているものの、斜面は原生林に近い相観を呈していた。本種は林道沿に多いセリ科の花上から、多数のハナ

カミキリに混じって採集された。

末筆ながら、現地調査にあたりお世話になった真壁多吉氏に心からお礼申しあげる。なお、上記の採集地点名「鹿紅橋」は橋の銘板から判読したもので、国土地理院の地形図に「鹿江橋」とあるのは誤りであると思われる。

参考文献

- ARIMOTO, H., 2000. A new species of the Genus *Denticolloides* (Coleoptera, Elateridae) from Hokkaido, Japan. *Elytra*, 28: 369-372.

(埼玉県さいたま市, 芳賀 馨)

○キイロウミハネカクシ沖縄本島の記録

Bryothinusa tsutsuii (K. SAWADA) キイロウミハネカクシは潮間帯に住むハネカクシで、これまでは鹿児島県トカラ列島(中ノ島・宝島)および本州だけから記録されている(保育社原色日本甲虫図鑑, 1985など)。筆者は本種を沖縄本島で採集しているので記録しておく。

7頭、沖縄県恩納村富着, 8.IV.2000, 筆者採集。採集した環境は、浅く入江状をした海岸で、陸地側に岩礁や一部コンクリートの護岸がある砂浜。採集時刻は午後5時ごろで、天気は晴れだった。潮の状態を海上保安庁水路部で調べたところ、午後3時40分ごろがこの日この付近の2回目の干潮であることが分った。本種はあたかも満ち始めた潮に追われるように一斉に岩の方を目指して歩いていた。また、本種に混じり全く同じ行動を示していた同属の別種(種名未確定)も14頭採集している。

なお、本種の本州における記録について柴田泰利氏(東京都町田市)におたずねしたところ、出所が明らかでなく疑問があるとのことであった。

本種を同定し、種々の情報を提供のうえ、発表を勧めて下さった丸山宗利氏(北海道大学農学部昆虫体系学講座)および本州における記録についてご教示をいただいた柴田泰利氏に厚くお礼申し上げる。

(神奈川県藤沢市, 渡邊 崇)

○礼文島で採集されたジョウカイボン科2種の記録

横浜市在住の渡 弘氏は、2001年7月に礼文島を訪れた際に、ジョウカイボン科の個体をいくつか採集され、後日それらの標本を筆者に恵与された。礼文島に産するジョウカイボン科に関する報告は、ほとんど無いと考えられることから、渡氏の採集データに筆者の手持ち標本のデータを加えて記録するとともに、礼文島産の個体の形態的特徴について図示により報告したい。

報告に当たって、貴重な標本を譲られた渡 弘、滝沢春雄の両氏ならびに礼文島に産する昆虫類の記録についてご教示を賜った利尻町立博物館の佐藤雅彦氏に厚くお礼申し上げます。

アイヌクビボソジョウカイ *Podabrus (Asiopodabrus) ainu ainu* NAKANE et MAKINO, 1990 (図1)

5♂♂2♀♀, 礼文島香深, 18. VII. 2001, 渡 弘採集。

アイヌクビボソジョウカイは、北海道に産する *Asiopodabrus* 亜属唯一の既知種で、大雪山山麓の勇駒別を基準産地として記載され、北海道全域に広く分布し各地で普通にみられる。本種には、亜種が1種知られており、基準亜種は北海道にのみ分布し、本州には亜種 *shirakawanus* TAKAHASHI et KIRIYAMA, 2000 が産する。礼文島からの本種の正式な記録は、現在までのところ恐らくないと思われる。

礼文島産の個体の♂交尾器の形態を図1に示す。北海道産の個体と比較したところ、外部形態はもちろんであるが、交尾器の形態についても細部の構造まで北海道産の基準亜種とまったく同様であり、特に差異は認められなかった。

キベリコバネジョウカイ *Trypferus niponicus* (LEWIS, 1879) (図2)

3♂♂, 礼文島香深, 18. VII. 2001, 渡 弘採集; 5♂♂1♀, 礼文島, 27. VII. 1966, 滝沢春雄採集。

キベリコバネジョウカイは、北海道から九州に至るまで日本全土に広く分布する種で、各地に比較的多い普通種である。北海道内でも各地で採集されており、一部にはきわめて多産するところがある。本種も礼文島からの正式な記録はないようであるが、このような分布を示す種であるだけに、本島に産することは、むしろ当然のことと考えられる。

礼文島産の個体の♂の最終腹板の形態を図2に示す。主として第9背板先端部に由来する複雑な構造体の形態は、本種の基本的な構造とほぼ同一で、BRANCUCCI (1985) あるいは高橋(1992)が図示した本種の腹部末端の形態と比較しても、大きな差異は認められなかった。

文 献

BRANCUCCI, M., 1985. Révision du genre *Trypferus* LEC-
ONTE (Coleoptera, Cantharidae). *Ent. Basil.*, 10: 251-
322.

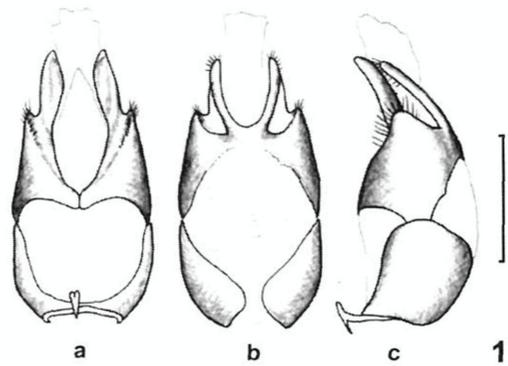


Fig. 1. Male genitalia of *Podabrus (Asiopodabrus) ainu ainu* NAKANE et MAKINO from Rebun Is. — a: ventral view, b: dorsal view, c: lateral view. (scale 0.5 mm).

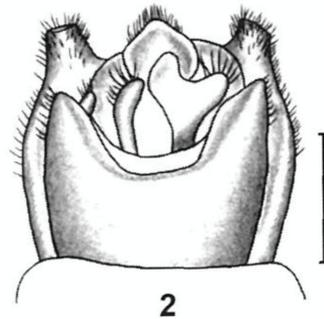


Fig. 2. Last sternite of *Trypferus niponicus* (LEWIS) from Rebun Is. (scale 0.5 mm).

高橋和弘, 1992. 神奈川県ジョウカイボン科. 神奈川虫報, (100): 71-124.

(神奈川県平塚市, 高橋和弘)

○ナガクチキムシ科甲虫の採集記録

ナガクチキムシ科の記録の少ない種などについて報告する。筆者が採集した個体については、採集者の記述を省略した。

1. ニキツキイニセハナノミ

Orchesia (Clinocara) duplicata NIKITSKY

1頭, 宮城県蔵王町宮城蔵王澄川沿い, 8.VII. 2001.



針葉樹倒木の枝から採集した。これまでに北海道(芳賀, 1993)と栃木県(森島, 1994), 山梨県(木元, 1997)の亜高山帯で採集されている。同日に近接した地点でアカオビニセハナノミ *Orchesia imitans* LEWIS も見られたが, 本種の方が新しい材を好むようである。

2. カバイロニセハナノミ

Orchesia ocellaris LEWIS

1 頭, 山梨県須玉町本谷川, 28.VII.2001; 1 頭, 静岡県本川根町山犬段, 3.VII.2001.

各地に多産する優先種であるが, 灯火に飛来した例は少ないので, 報告しておく。

3. ヨツボシホソナガクチキ

Dircaea shibatai HAYASHI

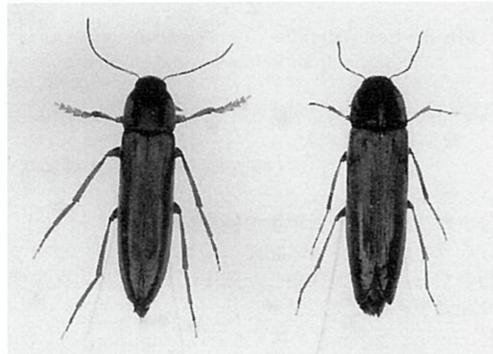
1 頭, 山梨県須玉町本谷川, 16.VII.1992; 1 頭, 同地, 24.VII.1992.

ミズナラ大木の樹皮下と菌類の生じた古い伐採木から採集した。本種は 1960 年代に長野県稲子湯と美ヶ原で採集された他, 当地域以外に記録がない(水野, 1994)。筆者はその後も何度か当地を訪れたが, 再発見することができなかった。北海道にいるヤセヨツボシホソナガクチキ *Dircaea quadriguttata* (PAYKULL) とは同一種との見方が強い。

4. カタクボソナガクチキ

Phloeotrinus filiformis (MARSEUL)

1 頭, 群馬県藤岡町渡瀬遊水地, V.1994 羽化, 浜野武材採集; 7 頭, 静岡県天城湯ヶ島町天城山向峠, 3.VIII.2001.



カタクボソナガクチキ (左:♂, 右:♀)

天城山では, 17:00 頃ブナ倒木の枝を叩いて採集した。平地からブナ帯まで生息しており, 平地では主に晩春, ブナ帯では夏季に出現するようである。

5. ムナクボナガクチキ

Euryzilora lividipennis LEWIS

5 頭, 栃木県栗山村田代山林道, 12.VIII.1993; 1 頭, 群馬県片品村武尊山, 22.VIII.1994; 4 頭, 福島県昭和村志津倉山, 23.VI.2001.

16:00 頃よりブナ立枯れ上を徘徊していたもの, ブラックライトに飛来したのも, ニクウスバタケの隙間に潜んでいたものを採集した。主にブナ林で採

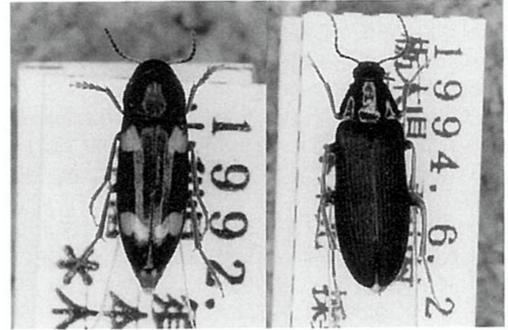
集される。

6. ヤサガタナガクチキ

Melandrya parallela NOMURA et KATŌ

1 頭, 栃木県栗山村田代山林道, 15.VI.1994; 4 頭, 同地, 22.VI.1994.

樹皮のはげたブナ立枯れに飛来したものとブナ立枯れ根際のコケが付着した部分に潜んでいたものとを採集した。これまで報告された産地は群馬県, 栃木県, 長野県, 静岡県の数カ所のみ(水野, 1994)。夕刻に活動するらしい。



左: ヨツボシホソナガクチキ, 右: ヤサガタナガクチキ。

末筆ながら, カタクボソナガクチキの標本を恵んでくださった浜野武氏に厚くお礼申し上げる。

参考文献

- 芳賀 馨, 1993. 上土幌町上土幌駅跡土場で採集された甲虫。上土幌町ひがし大雪博物館研究報告, (15): 31.
 水野弘造, 1994. ナガクチキムシ漫談 (10). 北九州の昆虫, 41(2): 97, 100.
 森島直哉, 1994. 栃木県日光市における日本未記録のナガクチキムシ。月刊むし, (286): 25.
 木元達之助, 1997. 奥秩父八丁平における甲虫類の採集記録。月刊むし, (317): 36.

(東京都足立区, 木元達之助)

○「おがさわら丸」に飛来したリュウキュウツヤハナムグリについて

甲虫の人為的な移動に関連する興味深い事例に遭遇したので, 報告する。おがさわら丸は東京の竹芝桟橋と小笠原諸島の父島を結ぶ大型船であるが, 毎年 6 月の返還祭に合わせて八丈島に臨時寄港する。2001 年の小笠原調査帰途の船はちょうどこの臨時寄港便にあたり, 6 月 29 日午前 7 時頃八丈島底土港に停泊した。わずか 30 分ほどの短い停泊時間であったが, 同じ船に乗り合わせた小笠原自然文化研究所の稲葉 慎氏が, 散歩に行った甲板で拾ったというリュウキュウツヤハナムグリ *Protoetia preyeri* をご恵与下さった。稲葉氏は採集した個体の他にも船上を飛翔する個体を一頭目撃したとのことである。なお, 八丈島に本種が侵入したのは, 1980 年代中頃と考えられており, 園芸樹に付着してきたものであろうと想像されている(西村, 1985)。八丈島

の情報に詳しい高桑博士によれば、現在本種は八丈島では極めて普通に見られる種になっており、街中や港周辺でも飛び交うのが目撃されるという。なぜ本種が甲板に飛来したかは不明であるが、もしこのまま「乗船」を続けるようなことがあれば本土や小笠原に運ばれる可能性もある。長い年月の中では、今回のようにたまたま船の甲板に落下したものが遠方に運ばれる、「船を使った移動」ということも稀には生ずることなのかも知れない。

末筆になったが、貴重な標本をご恵与頂いた稲葉慎氏と本種の八丈島における現状などについてご教示頂いた高桑正敏博士に感謝する。

参考文献

西村正賢, 1985. 八丈島でリュウキュウツヤハナムグリを採集. 月刊むし, (178): 17.
(神奈川県立生命の星・地球博物館, 苅部治紀)

◇2001年度採集例会報告◇

2001年度の採集例会は、7月28-29日に、御座石鉱泉にて行われた。

三年間連続で日本甲虫学会との合同採集例会を和佐又山で開催してきたが、4年連続となる2001年は場所を南アルプスの麓に移した。

参加者は15名とこじんまりであったが、その分参加者の親睦には有意義であった。

時期的には、ピークが過ぎてやや乾燥ぎみであり、カミキリムシなどは、花の条件のわりには今ひとつであり、青木鉱泉まで採集に出かけた人たちの

ほうの成果は良かったようである。ただし、ハムシ、ゾウムシ、コメツキの御三家はさすが充実しており、たたき網でハム・ゾウ・コメを落すだけでも時間は有意義に過ぎた。旅館のわきに、樹皮下が猛烈に食害されている、古い白樺の材が積んであり、キンチョールをかけると数分の遅れでマルクビケマダラカミキリが出てきた。30分程度の中に、二人で8頭ほど採集できた。その他おもしろいものとしては、ミヤマモモトカミキリ1♀を得ている。

御座石鉱泉から鳳凰小屋まで6時間かかるが、鳳凰小屋の主人の細田浩市氏は採集の名人であり、多くの貴重な採集品を採集されている。細田氏は小屋に上がられていたが、細田氏の鳳凰小屋での採集品が氏からお土産として残されていて、参加者にくばられた。懇親会は相変わらずあっという間に時間が過ぎ、御座石の夜は更けていったが、台湾で稀に見る体験をされ、何とか帰国された谷角康彦氏のお話は実に迫力のある、貴重な話であった。

水野弘造氏によれば、御座石・鳳凰小屋付近で甲虫が2700種記録されているという。

2002年度は大会(大阪市立自然史博物館で11月23-24日の予定)と採集例会の両方が甲虫学会と合同で開催される予定である。

(企画担当, 大木 裕)

◇会員動静◇



天 野 村 英 世
 野 村 英 世
 日本新報協会 日本甲虫学会
 合同採集会
 2001年7月28日
 山梨県韭崎市
 鳳凰山 御座石鉱泉
 水野弘造
 大木 裕
 稲葉 慎
 高桑 正敏
 谷角 康彦
 細田 浩市
 野村 英世

◇会計報告◇

1. 2000年度決算(2000年1月1日~12月31日)

収入	予算	決算	増減
前年度繰越金	4,800,000円	4,983,361円	183,361円
会費	3,400,000	3,520,000	120,000
広告費	60,000	55,000	-5,000
出版物売上金	98,000	98,000	0
雑収入	0	60,035	60,035
合計	8,358,000	8,716,396	358,396

支出	予算	決算	増減
会誌印刷費 (Elytra)	2,000,000円	2,478,760円	478,760円
会誌印刷費 (甲虫ニュース)	800,000	771,330	-28,670
会誌送料	600,000	611,993	11,993
通信費	100,000	103,268	3,268
事務費	120,000	142,465	22,465
大会助成費	100,000	100,000	0
予備費	50,000	0	-50,000
次年度繰越金	4,588,000	4,508,580	-79,420
合計	8,358,000	8,716,396	358,396

2. 特別会計2000年度決算

収入	支出
前年度繰越金	1,695,589円
利息	688
次年度繰越金	1,696,277円
合計	1,696,277

(会計担当, 齊藤明子)

甲虫ニュース 第136号

発行日 2001年12月25日

発行者 大林延夫

編集者 妹尾俊男(編集長), 長谷川道明, 川島逸郎,
奥島雄一, 鈴木 互, 吉富博之

発行所 日本鞘翅学会 〒169-0073東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館動物研究部昆虫第2研究室 ☎ 03-3364-2311

印刷所 (株)国際文献印刷社

年会費 6,000円(一般会員)

郵便振替口座番号 00180-3-401793

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00,0,1,2,3,4,5,6号,有頭ダブル針も出来ました。その他,採集,製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社

(会計担当, 齊藤明子)